

# コライス講座とトインビー論争

## 近現代イギリスにおける「ギリシア」の問題

橋川 裕之

### はじめに

『歴史の研究』などの著作で世界的に知られるイギリスのアーノルド・J・トインビー（1889-1975年）が、比較文明史家や国際政治学者として以外に、ギリシア史研究者としてのキャリアを有していたことは一般的には注目されることがない。本稿で取り上げるのは、トインビーがギリシア史家として専ら認知されていた時代に生じ、彼の最初の教授職を奪うに至った一論争の政治・思想的背景である<sup>1)</sup>。

オックスフォード大学ベイリオルカレッジで古代史を専攻した後、イギリス政府の情報局に勤務していたトインビーは、第一次大戦終戦後の1919年、ロンドン大学キングズカレッジに創設された講座の初代教授に抜擢された。正式名称を「近代ギリシアおよびビザンツの歴史・言語・文学のコライス講座」(通称、コライス講座)<sup>2)</sup>とし、今日まで続いているこの著名な講座は、当時のキングズカレッジ学長ロナルド・バローズがイギリスにおけるビザンツ・近代ギリシア研究を促進するため、ギリシア人の寄付を募って創設にこぎつけたものだった<sup>3)</sup>。

弱冠30歳にしてコライス講座の教授となったトインビーであったが、わずか5年ほどの任期で退職を余儀なくされる。問題となったのは彼の着任後の「反ギリシア的」行動であった。かねてから中東情勢に深い関心を有していた彼は、ギリシア軍のスミルナ占領によって始まったギリシア・トルコ戦争（1919-1922年）を取材するため大学に休暇を申請し、1921年、戦地の小アジア西部へと向かった。大学関係者には伝えられていなかったが、彼はマンチェスター・ガーディアン紙の特派員として小アジアに行っていたのであり、まもなく紙面にはギリシア軍の残虐行為を批判する彼の記事が掲載され始めた。また、彼は取材から帰国して

半年ほどで『ギリシアとトルコにおける西方問題』<sup>4)</sup>と題するルポルタージュの書物を出版し、その中でギリシア軍が小アジアで行ったトルコ人に対する残虐行為を克明に記録し、ギリシアの小アジア侵攻を厳しく批判したのである。

寄付金によって雇用された教授が、給与以外の報酬を新聞社から得て戦地取材を行った挙句、主要な寄付者たちの母国を批判するという事態に、寄付者委員会のメンバーは激怒し、トインビーの解任を大学当局に強く求めた。これに対してロンドン大学理事院は学問および思想信条の自由を盾にトインビーを擁護したため、その処遇問題はイギリス国内メディアをも巻き込み、2年間にわたって激しい論議の対象となった。最終的には理事院が辞任を認め、1924年夏にトインビーがコライス講座を自発的に去ったことで事態は収拾された。

第一次大戦後のイギリスにおいて、またイギリスにおけるビザンツ・近代ギリシア研究の草創期に生じたこの事件は、学問の世界ではキングズカレッジのスカンダルとして広く記憶されることになったが、事件自体は長らく研究の対象とはならなかった<sup>5)</sup>。近代ギリシア史家リチャード・クログによる最初のモノグラフ『政治と学園 アーノルド・トインビーとコライス講座』が現れたのは、トインビーの死から10年余りを経た1986年である。この著作においてクログは、パローズによるコライス講座の創設準備からトインビーの辞任に至るまでの事件史的な経緯を、関係者の私信などをもとにして極めて仔細に跡づけている。近代ギリシア史家として彼が着目したのは、ギリシア人たちのコライス講座運営への関与であった。その論点を大雑把に要約すれば次のようになるだろう。パローズと交友があったギリシア首相エレフテリオス・ヴェニゼロス（在職1910-15、1917-1920、1928-32年）を筆頭に、駐英ギリシア大使や在英ギリシア人コミュニティの有力者らは、当初からギリシア研究のための講座創設に協力的であり、資金援助を惜しまなかった。しかし、最大の功績者であるパローズが1920年に病死すると、その運営には寄付者委員会のギリシア人らが一層の影響を及ぼすようになった。トインビーの辞任は、その予想外の行動があったとはいえ、キングズカレッジという学問の場に学外のギリシア人が介入し、ギリシアの政治問題が持ち込まれた結果生じた<sup>6)</sup>。

以上のように、クログは『政治と学園』で、事件史的な関心に基づ

いて 20 世紀初頭におけるイギリス・ギリシア関係の一面を明らかにしたわけであるが、トインビー論争を再度取り上げた 1993 年の論文では、学問の自由やその政治性といった問題は背景に退き、フィルヘレニズム（ギリシア文化の愛好）<sup>7)</sup>の問題が前面に現れている。クログは、パローズとトインビーを取り上げ、パローズを、ギリシアの拡張主義に同調したイギリス人フィルヘレンの中心的イデオログとし、トインビーを、パローズらの熱烈なフィルヘレニズムからの離脱者として特徴づけている<sup>8)</sup>。

本稿において筆者が試みるのは、クログが 1993 年の論文で行ったような、トインビー論争を思想的に読み解く作業である。ただし考察のポイントは異なっている。本稿ではクログが踏み込まなかったテーマ、すなわちイギリスにおけるフィルヘレニズムとギリシア・ナショナリズムの関係性の問題が考察される。筆者が特に注目するのは、コライス講座の創設とトインビー論争に関わったイギリス人フィルヘレンとギリシア人の、ギリシアについての認識とそこに潜んでいた差異である。果たして、彼らはギリシアの過去・現在・未来をどのように思い描き、そこにはいかなる重なりやズレがあったのだろうか。

本稿の限られた紙幅で問題のすべてを解明し、全体像を提示するのは不可能な話である。したがって本稿では、トインビー論争の前史的な部分、コライス講座の創設からトインビーの教授就任までに時期を限定して考察を進めたい。前史の検討とはいえ、この考察の結果、『西方問題』に始まるトインビー論争を考える上で、そしてイギリスのフィルヘレニズムとギリシア・ナショナリズムの歴史的関係を考える上で、看過できない重要な思想的構図が明らかになるであろう。

## 1. イギリスのフィルヘレニズムとギリシアのナショナリズム

本章では、コライス講座とトインビーの問題をより広い歴史的コンテクストの中で理解するために、20 世紀初頭におけるイギリスのフィルヘレニズムとギリシア・ナショナリズムの性格を検討しておきたい。

伝統としては中世やルネサンス期に由来する近代ヨーロッパのフィルヘレニズムは、それが本格的に流行し始めた 18 世紀においては貴族主義的で教養主義的な性格を強く帯びていた。古代ギリシア文化を愛好す

るためには、古代ギリシアに関する知識を必要とし、18世紀の段階で高度な古典教育を受けることができるのは専ら上流社会層の子弟に限られていたからである。とりわけ、ギリシア独立戦争期のフィルヘレニズムは、新古典主義やロマン主義といった文学・芸術上の一大潮流と切り離して考えることはできない。西欧の知識人たちは、ギリシアの再生が、古代ギリシア文化の体現する人間の自由、権利、理性といった失われた諸価値の再生につながるとの信条を抱いていたのである<sup>9)</sup>。

しかし、20世紀初頭のイギリスのフィルヘレニズムは、このようなロマン主義的フィルヘレニズムとは性格を大きく異にしていた。ウィンストン・チャーチルが回想録『世界の危機』で興味深い記述を残しているので、それを引用してみよう。1921年春頃、イギリスの対ギリシア・トルコ政策について首相ロイド・ジョージは当時、陸軍相を務めていたチャーチルへ次のように語ったという。

「ギリシア人は東地中海の未来の人民なんだ。彼らは多産で、エネルギーに満ちている。彼らはトルコの野蛮に対してキリスト教文明を体現するんだ。奇怪な話だが、彼らの戦闘力は我々の将官たちから過小評価されている。大ギリシア（Greater Greece）は大英帝国にとって計り知れない利益となるだろう。ギリシア人は、伝統的に、傾向的に、それから利益によって、我々と親しい。彼らはいまや5、600万の民族だし、もし彼らがかつての領土を保有することができたら、50年後には2000万の民族になるだろう。彼らはいい船乗りだし、今後、海軍力を増強するだろうし、東地中海の枢要な島嶼をすべて押さえるだろう。こうした島嶼は、潜在的な未来の潜水艦基地だよ。それらは、スエズ運河を経てインド、極東、オーストラリア大陸に及ぶ我々の連絡路の側面に位置する。ギリシア人は感謝の気持ちを強く持っているし、我々がギリシアの国家的拡大期にその強力な友人であるなら、ギリシアは、大英帝国の主要な交通網が保たれるのに必要な一つの保証になるだろう。ある日、ネズミがライオンを繋ぐひもを噛んでしまうかもしれないしね。」

目下小アジアでトルコと戦火を交えているギリシアを積極的に支援すべきだとしたロイド・ジョージに対し、チャーチルは国内の親トルコの世論、厳しい軍事・財政状況を鑑み、今以上の反トルコ・親ギリシア政策を止めるべきだと答えたという<sup>10)</sup>。結局、イギリスによるギリシア・

トルコ戦争への介入は行われず、翌年の1922年、ギリシアは決定的な敗北を喫したわけであるが、ここで重要になるのは、ギリシアが大英帝国の将来と関連して考えられている点である。これは何も首相のロイド・ジョージに限られる話ではなかった。同時期のイギリスのフィルヘレンたちは、政情不安定なギリシアにおいてイギリスに利する要素、すなわち首相ヴェニゼロスと大ギリシア主義を熱烈に歓迎していたのである<sup>11)</sup>。

ギリシアの複雑な状況についても言及しておく必要があるだろう。19世紀半ば頃から、ギリシアでは「メガリ・イデア」の実現をスローガンとする新たなナショナリズム、いわゆる大ギリシア主義が顕在化し始める。メガリ・イデアというギリシア語が含意するのは、トルコ人の手からコンスタンティノープルと聖堂アヤ・ソフィア、およびヨーロッパと小アジアの失われたビザンツ領すべてを奪回し、ビザンツ帝国を再興しようとするヴィジョンである。19世紀後半から20世紀初めにかけての、ギリシアの執拗な版図拡張政策の背後にあったのはこのイデオロギーであり、その最大の奉じ手と目され、大ギリシア主義者からの期待を集めたのがクレタ島出身の政治家ヴェニゼロスであった<sup>12)</sup>。

クレタ島で弁護士業を営んでいたヴェニゼロスは、クレタ島のギリシア人解放運動を率い本土への統合を実現させた功績を買われ、1910年、首相に選出される。しかし第一次大戦が勃発すると、協商国側について参戦することを主張した彼は、中立を主張する国王コンスタンディノスおよびその一派と激しく対立するに至り、1915年3月、首相の座を退く。直後に実施された総選挙で勝利を収め、再び首相に選出されたヴェニゼロスは、同盟国側についてブルガリアを牽制するため、イギリスとフランスに軍団をテサロニキに上陸させるよう求めた。同年暮れ、この行動に反対した国王が、再びヴェニゼロスを解任したため、ヴェニゼロスはイギリスとフランスの占領するテサロニキで臨時政府を設立し、ギリシアは国王政府と臨時政府の両立する分裂状態に陥った。

1917年、英仏両軍のアテネ進軍を前にコンスタンディノスが退位し、ヴェニゼロスが統一ギリシアの首相に復帰したため、ギリシアは正式に協商国側について参戦することになった。一時的な国家分裂を経ながらも大戦の戦勝国となったギリシアは、1919年5月、協商国とトルコ間の講和条約締結を待たずして、軍団を小アジアのスミルナに上陸させた。

ここにギリシアにとっては破滅的な結末を迎えることになるギリシア・トルコ戦争が始まったのである<sup>13)</sup>。

第一次大戦期ギリシアにおけるヴェニゼロスと国王の確執から明らかになったのは、ヴェニゼロスの奉じる急進的な領土拡張主義と国王一派の慎重な中立主義とがほぼ拮抗するイデオロギーであったということである。おそらくメガリ・イデアの実現それ自体はギリシアの国民的な悲願であっただろうが、それをヴェニゼロスに託すか、託さないかというのが問題の焦点だったのである。そうでなければ、1920年、セーヴル条約によってスミルナとその周辺地域の将来的領有がギリシアに認められたにもかかわらず、ヴェニゼロスが総選挙で大敗して首相の座を失い、亡命していたコンスタンディノスが国王の座に戻ったことの原因を説明できないだろう。

ヴェニゼロス失脚後も継続された小アジアの戦争において、一時はアンカラに迫るほどの勢いを見せていたギリシア軍であったが、前線と補給線を伸ばしきったため次第に劣勢に転じ、1922年春の段階ですでに勝敗の行方は決していた。ケマル率いるトルコ軍はイギリスの提示した和平案を拒否して攻勢を続け、同年9月、ギリシア軍最後の拠点スミルナに侵攻した。その際、放火と虐殺が行われ、市内のギリシア人集落とアルメニア人集落が焼失し、両住民あわせて数万人が命を落としたといわれている。これが近代ギリシアにおいて「スミルナの惨事」として記憶されている大事件である。翌年には、歴史的に有名な住民交換がギリシアとトルコの間で行われ、小アジアのギリシア人集落は消滅した。クログの言葉を借りるなら、「メガリ・イデアという捉えどころのない夢は、スミルナの灰燼に帰した」のである<sup>14)</sup>。

そして、奇しくも「スミルナの惨事」のほぼ1ヵ月後、1916年の首相就任以降、一貫して親ギリシア・反トルコ政策をとってきたロイド・ジョージは保守党の造反にあって首相の座を退くことになった。

ロイド・ジョージはこの時期のイギリス政界において、ヴェニゼロスを支持し、ギリシアの利益をイギリス、あるいは協商国の利益と同一視するようなフィルヘレニズム（ヴェニゼロス主義的フィルヘレニズム）を体現した人物であった。確かに、チャーチルが示唆しているように、中央政界においてロイド・ジョージのようなフィルヘレニは少数派であり、社会全般的な現象というには程遠いものだったが、政界のみならず、

文壇や学界において一定数の信奉者を見出したという点においては、間違いなく現象であった<sup>15)</sup>。

D・レーゼルによれば、西洋人フィルヘレンたちの大ギリシア主義への同調は、バイロンのギリシア表象が主流であった19世紀の段階からすでに始まっていたという。一部の親ギリシア的文人たちは、ギリシアがアテネを首都に独立を達成した後、コンスタンティノープルの解放がギリシア独立戦争の最終目標であると表現した。しかし、こうした新たな表象は、アテネをギリシア再生運動の象徴とみなしてきたヨーロッパのフィルヘレニズムにおいて、イデオロギー的なジレンマを生じさせるものだった。レーゼルはイギリスの作家コンプトン・マッケンジー（1883-1972年）の文章を紹介した後で、次のように述べている。

マッケンジーやその他の外国人フィルヘレンらにとって、ギリシアの真の自己とは異教的過去であり、彼らはビザンツ文明というよりむしろ古典文明の復興を目指していた。ギリシアのコンスタンティノープルがいかにもアテネのギリシア文化を復興させるかは、決して明確には表明されなかった。ほとんどのフィルヘレンは、生をバルテノンに持ち帰るための道がコンスタンティノープルとアヤ・ソフィアを経由するという論理、あるいは非論理を単に受け入れただけであった<sup>16)</sup>。

1910年代イギリスのヴェニゼロス主義的フィルヘレニズムが内包していたのは、まさにこのギリシアの過去に関するイデオロギー的なジレンマだった。コライス講座創設者パローズの例は示唆的である。例えば、1919年1月、ギリシア支援を目的として開かれた集会において最初に演壇に立った彼は、ギリシア独立戦争をビザンツ人によるトルコ人への反乱と位置づけ、コンスタンティノープルとアヤ・ソフィアの解放を熱烈に訴えた。その一方で、彼はギリシア人をヘレネスと呼び、敬愛するヴェニゼロスを古代アテネの英雄ペリクレスになぞらえるなど、バイロンのフィルヘレニズムの伝統にも棹差していたのである<sup>17)</sup>。

このパローズによるコライス講座の創設と初代教授トインビーが引き起こした論争は、同時期イギリスのヴェニゼロス主義的なフィルヘレニズムの内的ジレンマや、イギリスのフィルヘレニズムそれ自体の多面性、そしてそれらへのギリシア・ナショナリズムの影響を浮き彫

りにするのである。

## 2. コライス講座の創設

本章ではまず、講座のコンセプトと名称がバローズとそのギリシア人協力者との交渉の過程でいかにして定められていったのかを検討し、次いで、トインビーの就任講義および司会を務めたヨアニス・ゲンナディオスの演説を詳細に分析する。講座創設へ向けた折衝から浮かび上がるギリシアの過去に関する認識の相違は、トインビーとゲンナディオスの講演テキストの対比的性格によってより鮮明になるであろう。

### 1) 新講座の名称とコンセプト

ロナルド・バローズ(1867-1920年)は、オックスフォード大学出身の古典学者である。1891年から1897年にかけて、グラスゴー大学で古典学教授ギルバート・マリー<sup>18)</sup>の助手を務めた後、1898年から1908年までカーディフ大学でギリシア語教授、1908年から1913年までマンチェスター大学で同じくギリシア語教授を務め、1913年にキングズカレッジ学長に任命された。ギリシア本土で地誌学的研究を行ったことがきっかけでその国内政治に関心を持ち始めた彼が、ヴェニゼロス主義的なフィルヘレニズムを明確に表明したのはマンチェスター時代末年の1913年である。彼は『マンチェスター大学雑誌』に「ヘレネスによるクレタ人ヴェニゼロスへの歌」と題する詩を寄稿し、その中でヴェニゼロスをペリクレスに喩え、ギリシアの発展を指導する存在として賛美している<sup>19)</sup>。

バローズがヴェニゼロス主義的なフィルヘレニズムを原動力に政治的活動を展開し始めるのは、1913年、キングズカレッジ学長に着任し、ロンドンの学界や経済界、そして在英ギリシア人コミュニティとの強力なコネクションを得てからである。同年、彼は、ロンドン経済学校校長ウィリアム・ベンバー・リーヴズ<sup>20)</sup>とともに、イギリス・ギリシア間の多分野における友好・協力関係を推進することを目的とした民間組織「イギリス・ギリシア同盟」の設立に参加し、D・J・カサヴェッティやA・C・ヨニデスらロンドンのギリシア系有力者たちと知り合っている。おそらくバローズは、自らの計画への理解を彼らから得たことで、



マンチェスター時代からの念願であった近代ギリシア語講座の創設を具体的に考え始めるのである<sup>21)</sup>。

当初、パローズが講座運営のための財政援助を期待したのは、ヴェニゼロスが首相を務めるギリシア政府であった。しかし、1915年、ヴェニゼロスが国王との対立によって二度首相の座を解任される事件が生じたため、パローズは方針を転じ、カサヴェッティやヨニデスらを介して在英ギリシア人を対象に寄付を求めた。この要請に対して、ロンドン、リヴァプール、マンチェスター、さらには国外のマルセイユ・コミュニティのギリシア人たちが寄付を行い、パローズは講座運営に必要な2万ポンド近い額を確保することに成功した。講座設立に先立って、寄付金を管理する寄付者委員会が発足し、次いで委員会と大学との間で寄付金管理に関する細則が定められた結果、ロンドン大学理事院は正式に新講座の創設を認可した<sup>22)</sup>。

講座の寄付者が軒並みギリシア人であったこともさることながら、それにもまして興味深いのは、講座のコンセプトに関してパローズとギリシア人との間にズレが存在し、それが講座の正式名称が決定するまでの過程に反映されていると思われる点である。クログは、1913年の時点でパローズが構想していたのは近代ギリシア語講座の創設であったとしている。しかし、最終的な講座の名称は「近代ギリシアおよびビザンツの歴史・言語・文学のコライス講座」だったのである。以下では、なぜ講座名称にギリシア独立期にパリで活躍したギリシア人学者アダマンディオス・コライスの名が冠せられたのか、そして、なぜ対象時期にビザンツが含まれることになったのかという問題について考えてみたい。

まず、講座の名称の変遷をクログの研究に拠りながら見てみよう。最初期の証拠は、ギリシア銀行総裁で、経済史家でもあったA・M・アンドレアディスの1915年2月20日付、パローズ宛の書簡と、駐英ギリシア大使ヨアニス・ゲンナディオスの同年10月2日付、パローズ宛の書簡である。それぞれ資金協力に前向きなヴェニゼロスの返答をパローズに知らせるための書簡であるが、双方において講座の名称は「近代ギリシアの歴史と文学の講座」と記されている<sup>23)</sup>。

肝要なのは、言語から歴史と文学へ対象テーマの力点が変化しつつも、この段階での対象時期があくまで近代ギリシアに設定されていた点である。ところが、パローズは、1916年7月17日付で大学事務員J・L・

ハルトークに宛てた書簡で、講座の名称に関して注目すべき記述を残している。パローズはカサヴェッティから、富裕なギリシア系イギリス人女性ヘレナ・スヒリズィが運営に必要な全額を寄付すると聞かされ、「その寄付人（スヒリズィ）はおそらく、近代ギリシアの文学と歴史の講座という名称を望むでしょう。「およびビザンツの」という語が付されるかもしれませんが。」と記しているのである。この文言は、ギリシア系女性スヒリズィがビザンツ期に関心を有していたという事実だけでなく、パローズがここまでビザンツ期を念頭に置いていなかったことをも示唆しているのである<sup>24</sup>。

理由は知られてはいないが、結局、スヒリズィは全額寄付を取りやめ、部分的な寄付を行うに留めた。しかし、全額ではないにせよ、彼女からの多額の寄付は講座の名称に「およびビザンツの」という語が加わったことに多少なりとも関係しているだろう。パローズは、1917年5月7日付でマルセイユのギリシア人富豪 M・A・ミタランガに宛てて送った私信の中で、講座について「近代ギリシアおよびビザンツの文学・歴史・文献学の学科」と言及している。ただし、この時点でも講座の名称は正式なものではなかったと思われる。というのも同年10月、ギリシア国会で講座への7年間の寄付が決議された際、講座は1915年の時点と同じ名称「近代ギリシアの歴史と文学の講座」で呼ばれたからである<sup>25</sup>。

「近代ギリシアおよびビザンツの歴史・言語・文学のコライス講座」が正式名称として知られるようになったのは、1918年春にロンドン大学理事院が講座の創設を正式に認可してからであった。そのため、名称にコライスの名が冠せられたのは、1917年から1918年春にかけてということになる。クログは、時期については不明としているが、コライス選ばれた理由に、寄付者の多くがコライスと同じヒオス島出身であったことを挙げている。しかし、彼は見落としているのだが、この問題について、さらにはコライス講座のコンセプトを考える上で、注目しなければならないのはギリシア大使ヨアニス・ゲンナディオスの存在である<sup>26</sup>。

ヨアニス・ゲンナディオス（1844-1932年）は、ギリシア独立戦争の英雄にして、国立アテネ大学の創始者でもある学者ヨルギオス・ゲンナディオスと、ヴェニゼロス家出身のアルテミスを両親に持つギリシア人エリートである。彼は、マルタ島のプロテスタント系ブリティッシュス

クールに進学し英語を習得した後、ロンドンのギリシア系企業に就職する。3年ほど務めた後、外交の世界に進路を転じ、1886年から1892年まで駐英ギリシア公使、そして1910年から1918年まで駐英ギリシア大使を務めた。彼は、ギリシア国内での政治生活に関心を持ちながらも、愛妻フローレンス・レイングとともに後半生のほとんどをロンドンで過ごした。この長年にわたるロンドンの生活において、ゲンナディオスは、有能な外交官として、また在野の学者として、さらには稀代の書物蒐集家として、政界や学界で広く知られるようになっていた<sup>27)</sup>。

駐英ギリシア大使という政治的に重要な座にあり、なおかつ母を通じてヴェネゼロス家とつながりを持ち、自身も熱烈なヴェネゼロス支持者であったゲンナディオスが、同じくヴェネゼロス支持者パローズの新講座創設計画に深く関与するのはいわば自然な成り行きであったと思われる。最初の段階でパローズとヴェネゼロスの仲介役を務めたゲンナディオスは、寄付者委員会の議長と委員会ロンドン・コミュニティ代表を兼務し、講座の顧問委員会のメンバーにもなっている<sup>28)</sup>。こうした彼の政治的重要性とともに看過できないのは、その知的関心の対象である。次節の考察でより明確に示されるのであるが、彼はアダマンディオス・コライスを近代ギリシア黎明期の国民的学者として尊敬すると同時に、ギリシアの古代的過去のみならず、中世的過去であるビザンツ史にも大きな関心を持っていたのである。コライスに関しては、ゲンナディオスはその著作すべてを所有していることを誇りにしていたし、近年まで続いたギリシアの言語問題ではコライスと同様、古代ギリシア語の特徴を多く残す文語体ギリシア語（カタレヴサ）を標準語にすることを強固に主張していた。一方、ギリシアの過去の問題については、彼は、古代を評価しビザンツを軽んじたコライスとは異なり、異教的な古代とともにビザンツとギリシア正教の伝統をも高く評価していたのである<sup>29)</sup>。

これらの事実を考慮に入れると、最終的に講座の正式名称が「近代ギリシアおよびビザンツの歴史・言語・文学のコライス講座」に決まった経緯には、ゲンナディオスの意向が強く働いていたと考えられる。しかし、コライスという名称の選択に関しては、ゲンナディオスが最も重要な役割を果たしたかもしれないが、スヒリズィの事例が示すように、「およびビザンツの」という語が付されたのは、彼の意向だけによるものではなかった。おそらくこの背後には、先に触れたような、ビザンツ

的過去の記憶によって動機づけられた大ギリシア主義という新たなナショナルイズムの流行があったと想定されるのである<sup>30)</sup>。

## 2) トインビーの選出

バローズが当初考えていたコライス講座教授の第一候補は、中近世のレヴァント研究で知られる在野の歴史家ウィリアム・ミラー<sup>31)</sup>であった。ミラーの名前は、1915年段階からすでに有力候補として挙げたものの、ミラー自身は給与がキングズカレッジからではなく、ギリシア人寄付者の基金から支払われることに警戒感を示していた。1918年、講座の創設が決定した後も、バローズやR・W・シートン・ワトソンら講座関係者は彼の説得を試みているが、ミラーの承諾は得られなかった。その結果、コライス講座は教授不在のままスタートすることとなり、バローズは新たな候補者を募るため、急遽、関係者に候補者の推薦を依頼した<sup>32)</sup>。

まず在英ギリシア人ジャーナリスト、C・ケサリーとC・ブプティスが候補に挙げたが、ゲンナディオスがこれに強く反対した。代わりにゲンナディオスはギリシア人神学者を示唆したが、バローズはそれに同意しなかった。フランス・ビザンツ学の大家シャルル・ディールに師事する若きビザンティニスト、L・イコノモスは、英語に堪能でないことを理由に、オックスフォード大学エクセター・カレッジのギリシア系ビザンティニスト、J・マヴロゴルダートは近代ギリシア語に堪能でないことを理由に見送られた。以降も、多くの人物の名が挙げたが、最終的に決まったのは、ギルバート・マリーの推薦した彼の娘婿アーノルド・トインビーであった<sup>33)</sup>。

当時のトインビーは、大学で学んだ専門分野で分類するなら古代ギリシア史の研究者であって、ビザンツ研究者でも近代ギリシア研究者でもなかった。言語に関してみれば、彼は古代ギリシア語には長けていたが、特別近代ギリシア語に長けていたわけではなかった。彼の選出は一見奇異に思えるかもしれないが、バローズの発想からすれば、これは極めて真っ当な人選であった。というのも、コライス講座を親ギリシア的な政治活動の一貫として創設したバローズにとって、教授候補者は、必ずしも学界で著名な、あるいは将来有望な専門研究者である必要はなかったからである。講座の政治的な趣旨を理解する人物であれば、第一候補の

ミラーや、その後拳がったケサリーやブプティスのようにジャーナリスト的な人物でもよかったのである。

トインビーにとって特別有利に作用したと思われるのは、彼がパローズのグラスゴー時代の恩師、マリーの娘婿であったこと以上に、彼が古代ギリシアの歴史だけでなく、同時代ギリシアの政治状況にも通じていたことである。1910年代半ばまでに、彼は古代ギリシア史と現代ギリシアの政治問題を主題に多くの論文や記事を発表していた。そして第一次大戦が勃発すると、情報局員として中東地域を担当し、イギリス政府が非公式に展開した反トルコ・プロパガンダ活動にも従事した。1919年初頭のパリ講和会議の際にはイギリス代表団の一員に選ばれていることから分かるように、彼は情報局員としての活動を通じて、中東時事問題のスペシャリストとして高く評価されるようになっていた。講座の人選を担当するパローズとゲンナディオスにとってトインビーが魅力的であったのは、まさにこの点であった<sup>34)</sup>。

ギリシアは1917年に首相に返り咲いたヴェニゼロスの指導下で戦勝国となり、その一方、同盟国側についたトルコは敗戦国となり、しかも国力を使い果たした状況にあった。パローズやゲンナディオスらヴェニゼロス支持者たちは、ビザンツ復興というギリシアの大いなる夢が実現間近だとみなし、ヴェニゼロスとギリシア政治の動向を注視していた。その彼らにとって、古代ギリシア史研究者でありながらギリシアを含む中東の時事・外交問題に精通し、なおかつ輝かしいエリート・キャリアの持ち主でもあったトインビーは、コライス講座教授に適任の人物であると思われたのである。結果として、彼らの意図からすればトインビーの選択は決定的な誤りだったことが判明するのだが、この段階では、パローズらはトインビーを熱烈なヴェニゼロス主義的フィルヘレンであると信じて疑わなかったのである。

### 3) トインビーの就任講義

1919年10月7日、パローズらを狂喜させたギリシア軍のスマルナ上陸から5ヵ月後、キングズカレッジ大ホールでトインビーのコライス講座教授就任講義が行われた。前年にギリシア大使を引退したゲンナディオスが司会を務め、ギリシアからは首相ヴェニゼロスその人も駆けつけたこの記念行事において、トインビーは「歴史における中世・近代ギリシアの位置」

と題する講義を行った。講義は好評を博し、トインビーの原稿はゲンナディオスの開会スピーチを前文に付して直ちに出版された。講義が行われた段階では全く問題とならなかったが、両者のテキストを比較検討すると、ギリシアの過去と現在について、ゲンナディオスとトインビーの間に、驚くほど大きな認識の相違があったことが明らかになる<sup>35)</sup>。

まずゲンナディオスであるが、彼はビザンツ史とギリシアの言語問題についての自らの見解を情熱的に、そしていささか冗長に語った。そのテキストは彼個人の性格や思想だけでなく、当時の知的状況や政治的雰囲気を知る上で興味深い点を多く含んでいる。彼は最初に簡単な挨拶を行った後、来賓のヴェニゼロスに言及し、次のように紹介している。

このたび我々は、この創設が実現するにあたって最も強力に働いた一人の人物を迎える栄誉に浴している。それは、我々この世の夢を現実のものに変え、ギリシアを恥辱から誉れある地位へと持ち上げ、パリに集った文明世界から彼自身とギリシアへの称賛、尊敬、そして確信を勝ち取った、我々最愛の信ずべき偉大なる指導者ヴェニゼロス閣下である<sup>36)</sup>。

次いで、メガリ・イデアという夢を育んだギリシアのビザンツ的過去について話題を向け、イギリスの歴史家エドワード・ギボンとその有名な『ローマ帝国衰亡史』を徹底的に攻撃する。「ギボンの『ローマ帝国衰亡史』は、並外れた労働と粘り強い努力と幅広い学識と、圧倒的な読書と研究のモニュメントであり続けるだろう」とした上で、彼は次のように述べるのである。

彼の個人的な傾向、奇癖、欠点といったものは、それらが彼の性格を損なったのと同じように、彼の仕事を台無しにした。記録するのが必ずしも愉快ではないようなその他の事例には言及しないが、彼が人生のある段階においてイスラム教 (Mohamedism) を信仰したこと、そして別の時にはカトリック (Romanism) への明確な傾向を示したことははっきりと確認されている。彼が、当時の西洋において一般的であったビザンツ・ギリシア人への暴力的偏見に深く包まれていたのは確実である<sup>37)</sup>。

ローマに始まる西欧の伝統に棹差していたギボンは、古代ギリシアの

文明と知性に尊敬の念を抱いていたので、ギリシアの征服者であるローマ人を赦さなかった。しかしその一方で、ギリシア人に対しては悪意ある嫉妬を差し向けた。ギボンが見せたこのような嫉妬、西欧人の嫉妬こそがビザンツを破壊する悪しき十字軍運動を惹き起こした、とゲンナディオスは続ける。

そして十字軍士たちがやってきて、その野蛮な一群は帝国を通過することを許された。だが、彼らは領土を荒らし、資源を奪い、住民を辱めた。彼らの不法な行いは、一般には「第四回十字軍」というおかしな名称で知られている、歴史上の盗賊的諸遠征にあって最大にして最悪の遠征において頂点に達したのだ。最後に、ビザンツ教会は教皇庁への普遍的従属から世界を救い、そうすることで宗教改革の到来を予告したとき、それが啓蒙と進歩を導く導火線のな仕事であったが故に、カトリック著述家たちの冷酷なる敵意と毒を含んだ中傷を生み出したのだ<sup>38)</sup>。

ビザンツ史についてみれば、いまやこうしたカトリック的偏見にまみれたギボンではなく、イギリスのJ・B・ビュアリヤや、フランス、ドイツの歴史家の仕事が参照されねばならない<sup>39)</sup>。とりわけ、「同時代西欧人に対するビザンツ人の大いなる優越性を確証し、11世紀にわたってヨーロッパの門に位置し、東西南北の野蛮人たちの絶え間ない攻撃を退けた帝国の計り知れない貢献を認める」G・シュランベルジェの著作こそ参照されねばならないとゲンナディオスは言う<sup>40)</sup>。この後、彼は言語問題について、講座にその名を冠するコライスの主張を紹介しながら、文語体ギリシア語の標準語としての重要性を説いてスピーチを締めくくった<sup>41)</sup>。

古代から現代に至るギリシア文化の連続性を所与の前提とした上で、ビザンツの遺産を重視する新たなギリシア・ナショナリズムを表現したゲンナディオスのスピーチに対して、トインビーの講義は、あたかも彼のその後の研究を予告するかのような比較文明論的な性質のものであった。

トインビーは西洋文明が古代ギリシアとローマの伝統に根ざすことを最初に確認し、東西ヨーロッパの歴史的発展の位相を比較検討する。西欧は、ローマ帝国崩壊後の暗黒時代を経て8世紀頃から発展を開始し、

今日の西洋文明の形成に至る。一方、通説的理解では、東欧はオスマンの支配によって暗黒時代に突入する。しかし、もしこの通説が正しいのであれば、ギリシアやロシアといった東欧諸国がこの2世紀間に飛躍的發展を遂げ、西洋文明に参入した事実はいかにして説明されるのか。このように疑問を提示したトインビーは、ギリシアの中世・近代の歴史上の位置を明らかにするために比較文明的考察に移る<sup>42)</sup>。

トインビーの議論の展開は以下のとおりである。まず7世紀以降のギリシア、あるいは東ローマ帝国を同時期の西欧と比較し、ギリシア史においても行政、民族構成、言語、文化の各面で、西欧が経験したのと同様の大きな変化があったとする。次いで14世紀以降に始まるオスマンのギリシア・東欧支配が、西欧におけるイングランド王国や神聖ローマやハプスブルク帝国の例に相応するとし、オスマン支配はギリシア民族の暗黒時代というより、その民族的自立を用意した時期だとする。

こうした比較から、ギリシア・東欧と西欧の歴史的発展の類似性を導き出した彼は、その一方で、彼が考える両者の相違点、すなわちステップと中東の影響についても言及する。ギリシア・東欧には古代から中世にかけて、中央アジアのステップを介してフン、アヴァール、スラヴなど多くの異民族が侵入し、国家に致命的なダメージを与えた。ギリシア国家にとって最も致命的であったのは、セルジューク・トルコの小アジア占領によって小アジアのトルコ化が進行したことであった<sup>43)</sup>。

ステップはギリシアに蛮族の侵入という脅威を与えたのであるが、中東は文明の対立というさらなる危機をギリシアにもたらした。ただし中世のギリシアは、中東の専制国家と全面的に対決した古代とは異なり、行政、社会秩序、建築などの点で中東的性格を多く取り入れ、その中東への態度も両義的であった。その結果、ギリシアは中東の暗黒時代の余波を被ることになった。

中世ギリシアは、そのヨーロッパの軌道から中東の軌道へと極めて深く引き込まれたために、中東の大惨事に巻き込まれることになった。というのも、11世紀、カリフの帝国とその一時的な領域支配は、5世紀前のローマ帝国のように、蛮族の侵入によって圧倒されたからである。中東の暗黒時代がここに始まり、その影は、まさに自らの暗黒時代から光へ向かって苦勞して進んでいた中世ギリシアに覆い被さった。1071年の後、小アジアに一斉に侵入したセルジ



ユーク・トルコ人は、中東文明をすでに踏みにじっていた張本人たる蛮族だったのである<sup>44)</sup>。

セルジューク・トルコ人のギリシアへの侵入は、その後のラテン人による搾取とオスマン支配の呼び水になるものだった。しかし、いまやギリシアは「アンシャン・レージュムの影の下から、他のヨーロッパ諸民族とともに出現した」。そのギリシアの現代的役割について、トインビーは次のように述べる。

中東の諸影響はもはや、ギリシアをその他のヨーロッパから差別化しないであろう。しかしこのことは、それらがギリシアに影響を及ぼさなくなることを意味しない。なぜなら、いまや全ヨーロッパは中東問題に関わっているからである。…その不可分の役割がヨーロッパの境界を定めることにあるギリシアは、ヨーロッパ共通の責任の一端を担うであろう。…ギリシアという国民国家は中東とヨーロッパの陸橋として、オスマン帝国の位置に取り付こうとしている。そしてギリシアの政治家たちは、トルコが決して解決しようとしなかった問題、つまり、ヨーロッパ人とイスラム教徒を、穏和な隣人として、さらに同じ民主制の構成員として共生させるといふ問題に気を配ることになるだろう<sup>45)</sup>。

最後に中東問題におけるイギリスの重要な役割について述ベトインビーは就任講義を終えた。

上でも触れたが、トインビーの講義原稿を一読して明らかなのは、彼が専門的歴史研究者としてではなく、比較文明論者や国際政治学者のようにギリシアの歴史を語っている点である。そしてそこには、『歴史の研究』で全面的に展開され、実証歴史学の立場から総攻撃を受けることになる、トインビー独自の比較文明論の萌芽がすでに見られるのである。

ゲンナディオスとの比較で重要になるのは、トインビーによる中世ギリシア、すなわちビザンツ帝国の位置づけである。トインビーは講義において、西洋と中東の二つの文明圏を措定し、さらに西洋文明において西欧と東欧を区分し、ギリシアを東欧に分類した。古代ギリシアについては、古代ローマとならぶ西洋文明の源泉として、近代ギリシアについては西洋文明に新たに参入した東欧の一員として捉えた。しかし、ビザ

ンツについて、彼が強調したのはその中東文明的要素であった。中世のギリシアは7世紀以降、ステップから度重なる異民族の侵入を経る過程で中東文明に接近し、18世紀になってようやく西洋文明に復帰する。ビザンツは地理的にはヨーロッパの境界に位置していたが、文明としては中東寄りであった。そして、ビザンツを破壊した最大の要因は、第四回十字軍と言うよりも、中東文明にも大打撃を与えたセルジューク・トルコ人の小アジア侵入であった。

トインビーとゲンナディオスの相違がどこにあるかは、ここまでの説明で一目瞭然であろう。まず、ギリシアの中世的過去をめぐる、ゲンナディオスとトインビーの見解は真っ向から対立する性質のものであった。ゲンナディオスにとって、ビザンツはイスラム世界とラテン・カトリック世界の間位置し、独自の文化を誇った中世のギリシア文明であり、正教を奉じてカトリックに抗い、宗教改革と啓蒙を間接的に導いたことで、西洋文明への貢献も大なるものがあった。一方、トインビーは、スラヴ人とセルジューク・トルコ人の侵入による影響を強調し、また、ビザンツが「中東の軌道」に引き込まれたと表現することで、ビザンツの西洋性、ヨーロッパ性そのものに疑問符をつけている。この段階のトインビーには、まだシュペングラー的な西洋文明批判は現れておらず、必然的に、あるいは無意識的に、西洋文明は中東文明の上位に置かれている。したがって、ビザンツを中東寄りに位置づけることは、その文明としての価値を低く評価することを意味していたのである<sup>46)</sup>。

次に政治的な立場についても両者は見解を異にしている。ゲンナディオスは熱烈な大ギリシア主義者としてヴェニゼロスにギリシアの未来を託し、メガリ・イデアの実現を確信していた。一方、トインビーが、パローズやベンバー・リーヴズのような熱烈なフィルヘレニズムから距離を置いていたことは明白である。上に述べたとおり、同時代イギリスのフィルヘレンたちは、大ギリシア主義の論理を受け入れ、ビザンツ帝国の再興を近代ギリシアの最終目標として構想した。しかし、トインビーにあっては、あくまで、ビザンツはギリシアの中東的な過去であり、古代および近代のギリシアとは区別されねばならなかった。トインビーが講義の末尾でキリスト教徒ヨーロッパ人とムスリムの共生を説いていることも注目し得る。彼は、ギリシアの拡大をひたすら待望するヴェニゼロス主義的なフィルヘレニズムとは一線を画し、より大局的な視座か

ら、つまり文明論的で政治学的な視座から中東問題を考えようとしているのである。

このように、トインビーの就任時点ですでに、彼とその他の講座関係者との思想的な断絶は明白であった。けれども、この段階でトインビーの見解が彼らの間で問題となった様子はない。おそらくそれは、トインビーを含め講座に関係したすべての者が、ギリシアの過去よりも、その現在と未来に気を奪われていたからである。ゲンナディオスとバローズは、ヴェニゼロスとギリシアの栄光を確信していた。トインビーは、幾分落ち着いた調子ではあったけれども、ギリシアの拡大を前提に、今後の中東地域におけるギリシアとイギリスの政治的責任を語った。ギリシアの将来を楽観的に捉えるという共通点が、内在する深刻な相違点を覆い隠していたのである。

## 結びにかえて

就任から1年余り後の1921年1月15日、トインビーはアテネに到着し、以降、約8ヶ月にわたってギリシア・トルコ戦争の戦地取材を敢行した。旅行の目的は、まさに就任講義でギリシアの課題として述べたキリスト教徒とムスリムの共存が、小アジアのギリシア領で実行されているかどうかを確認することであった。しかし戦地で彼が妻ロザリンドとともに目撃したのは、ギリシア軍がトルコ人に対して行った残虐行為の実態を示す数々の証拠であった。

トインビーは9月に帰国すると直ちに戦地取材を書物にまとめる作業に取り掛かり、翌年初夏、『ギリシアとトルコにおける西方問題』を出版した。トインビーはその同時代に生じたギリシアとトルコの軍事衝突について、ギリシア軍の残虐行為の記録に留めることなく、古代にさかのぼる歴史・文明的な問題として、また彼自身最近まで関与していた西洋の政治・外交上の問題として多面的に叙述している。

この書物が出版と同時にイギリスで賛否両論の大きな反響を呼んだのは、以下の二つの要因によるところが大きい。一つは、トインビーがシュペングラーの強い影響のもとで西洋文明批判をその主張の根幹に据えたことである。彼はギリシアとトルコの争いを、通常用いられた「東方問題 The Eastern Question」ではなく、「西方問題 The Western

Question」と表現し、争いの最大の責任を西洋文明と、それが周辺文明に及ぼす甚大な政治・文化的影響に帰したのである。二つ目は、近代ギリシアへの容赦ない批判であり、その文明的地位の格下げである。すでに見たとおり、就任講義では彼はビザンツを西洋文明とはみなさなかつたが、近代ギリシアについては比較的最近加わった西洋文明の一員とみなした。しかしこの『西方問題』において、彼はビザンツに由来する文明を近東文明として捉え、近代ギリシアをその中に位置づけたのである。つまり、彼が副題「文明の接触の研究」で示唆したのは、西洋文明と中東文明の接触ではなく、近東文明と中東文明の凄惨な暴力的接触なのである。

近東文明のギリシアも中東文明のトルコも、イスラム教徒とキリスト教徒が共生する地域を支配する資格はない。トルコ人は18世紀以来、キリスト教住民の独立運動を弾圧し、さらには1910年代半ばに正教徒アルメニア人の大虐殺を行った<sup>47)</sup>。その後ギリシアは小アジア支配に乗り出したものの、イスラム教徒トルコ人に対して数々の残虐行為を行った。こうした血で血を洗うような状況を作りだした張本人は我々の西洋文明とその矛盾した外交政策である。決してギリシアのみを攻撃対象にするものではなかったが、以上のような主張を骨子とする自著が政治的な論争を招く恐れがあることをトインビーは覚悟していた。彼は序文で次のように述べている。

私は恐れるのだが、ギリシアにとって好ましくない情報と考察がコライス講座の初代在職者によって出版されることになったのは、ギリシア人と「フィルヘレンら」にとって苦痛であるかもしれない。当然のことながら私はこのことを残念に思うが、それは学問的な観点からすると、小アジア問題についての私の結論がギリシアに好都合で、トルコに不都合であったよりかは幸運であると言えよう。現実の状況が、私や私のギリシア人の友人・知人にいかなる不快の念を催そうとも、少なくともそれは、英国の大学における学問上の寄付が関係国家のプロパガンダに用いられているという疑惑を取り去るものだ。

「学問的な研究に政治的な目的があるべきでない」というトインビーの主張は、その辛辣なギリシア・西洋批判とあわせて、コライス講座を政治的な意図を込めて立ち上げた関係者への挑戦状であるとも言えた<sup>48)</sup>。

イギリス・メディアや学界の書評が概ねトインビーに好意的であったのと対照的に、講座関係者たちは『西方問題』をギリシア民族への侮辱と受け取っていた。そして折しも、『西方問題』の出版から数ヶ月後に生じた「スミルナの惨事」が彼らのトインビーへの反感を決定づけた。この事件は、イコノモスによって緊急出版された英文報告書のタイトル「スミルナと東方キリスト教世界の殉教」からも窺われるように、ギリシアの国家的悲劇として在英ギリシア人に極めて大きな衝撃を与え、トルコ人への憎悪感情を掻き立てた<sup>49)</sup>。結果、トインビーは彼らから、赦されざる反ギリシア主義者にして親トルコ主義者として見なされるに至ったのである<sup>50)</sup>。

本稿の最初で触れたとおり、今回の考察は極めて限定的なものである。トインビー論争を政治・文化的問題として広く捉えようとするなら、『西方問題』の内容・記述や、論争の展開を仔細に検討しなければならない。しかし、事件をトインビーと講座関係者のギリシア認識という観点から見た場合、前史の段階で事件の思想的構図はほぼ決定されていたとすることができるだろう。

まず、講座創設の過程で明らかになったのは、イギリスのフィルヘレニズムとギリシア・ナショナリズムの微妙なズレであった。イギリス人学者パローズにとって、愛すべきギリシアとはまずもって古代であり、次いで近現代であった。一方、ゲンナディオスらギリシア人にとっては、無論古代的過去も重要であるのだが、ヨーロッパの啓蒙知識人たちから断罪されたビザンツの過去がナショナル・アイデンティティの重要な部分を占めていた。1910年代、パローズらイギリス人フィルヘレンと在英ギリシア人は密な関係を築いたが、両者が想像するギリシアは同一のものではなかったのである。

そしてその両者の関係に内在した矛盾やジレンマを、半ば意識的に半ば無意識的に抉り出したのが若きトインビーだった。彼の独自のフィルヘレニズムは、すでに就任講義において明確に表明されていた。この時点のトインビーにとって愛すべきは古代ギリシアであり、西洋文明の伝統であった。彼は、ビザンツについては非ヨーロッパ的、中東文明的要素を強調し、近代ギリシアについては西洋文明の一員としながらも、ヴェニゼロス主義からは距離を置いていたのである。

彼のフィルヘレニズムは続く過程でいっそうラディカルなものにな

る。戦地取材を経験し、ギリシア軍による残虐行為の存在を確信した彼は、近代ギリシアを彼の想定する西洋文明から除外し、ギリシアの利益を重視する政治的なフィルヘレニズムと決定的に袂を分かった。いふなれば彼は、中世・近代ギリシア研究の教授でありながら、古代だけでギリシアと繋がることを選んだのであり、以降、その行動や資質をめぐる激しい論争が生じるのは必然であった<sup>51)</sup>。

イギリスのフィルヘレニズムとギリシア・ナショナリズムの歴史的関係という観点から見ると、1910年代、ヴェニゼロスと大ギリシア主義への熱狂を介して成立した関係の最終局面に生じたのがこのトインビー論争だった。1920年、ヴェニゼロスが総選挙に敗れて首相の座を退き、政敵コンスタンディノスが国王に復位する。そして1922年、スミルナの惨事が生じ、ビザンツ再興を旗印とした大ギリシア主義は大打撃を被る。1920年代初頭に関係の媒介そのものが相次いで失われてしまったのである。以降、ギリシアは新たなナショナル・アイデンティティを模索し始め、イギリスのフィルヘレニズムもその政治的熱狂性を急速に失っていく。両者が次にいかなる関係を構築するのかという問題については、トインビー論争のさらなる考察とあわせて、今後の検討課題としたい。

#### 注

- 1) トインビーの生涯と業績については以下の著作を参照されたい。A.J. Toynbee, *Acquaintances*, London, 1967 (長谷川松治訳『交遊録』社会思想社、1970年); idem, *Experiences*, London, 1969 (山口光朔、増田英夫訳『回想録』社会思想社、1970年); S. Fiona Morton ed., *A Bibliography of Arnold J. Toynbee*, Oxford, 1980; W.H. McNeill, *Arnold J. Toynbee: A Life*, New York, 1989. ちなみに、トインビーは1925年から引退する1955年までイギリス王立国際問題研究所(通称チャタムハウス)の所長、およびロンドン大学の研究教授を務め、その間に有名な『歴史の研究』や、彼が編集主幹を勤め毎年刊行された『国際問題調査』など、膨大な量の著述を行った。中東を専門域とする国際政治学者E・ケドゥリーが、国際政治学におけるトインビーの業績を批判的に検討した論文E. Kedourie, "The Chatham House Version", in: idem, *The Chatham House Version and Other Middle-Eastern Studies*, new ed., New England, 1984, pp. 351-394も参考になる。周知のとおりわが国においては、トインビーはその文明論的研究のみが注目され、一部では歴史の託宣

者のように崇められるに至っている。その一方、わが国に限定される話ではないが、専門的歴史学の世界では彼の研究は科学的な厳密性を欠く大衆迎合的な二流文学として徹底的に攻撃され、現在その名も仕事も言及されることはほとんどない。こうした状況は彼にとっても我々にとっても幸運なものではないだろう。21世紀を迎えた今日、トインビーを20世紀に活躍した一人の学者・思想家として公平に、そして歴史的に理解しなおすことが必要だろう。

- 2) The Koraes Chair of Modern Greek and Byzantine History, Language and Literature. コライスとは、18世紀後半から19世紀初のギリシア独立戦争期にかけて、パリで活躍したギリシア知識人アダマンディオス・コライス(1748-1833年)のこと。講座の名称決定過程については第2章で扱う。コライスについての基本文献はS.G. Chaconas, *Adamantios Korais: A Study in Greek Nationalism*, New York, 1942.
- 3) コライス講座の歴代教授は以下のとおり。括弧内は就任年。A. J. Toynbee (1919), F. H. Marshall (1926), R. J. H. Jenkins (1947), C. A. Mango (1964), D. M. Nicol (1971), R. Beaton (1989).
- 4) A. J. Toynbee, *The Western Question in Greece and Turkey: A Study in the Contact of Civilisations*, London, 1922 (2<sup>nd</sup> ed., London, 1923). ちなみにケドゥリーは上に挙げた論文の中で、これを「彼が書いたものの中でおそらく最良の書物」と評している。E. Kedourie, *op. cit.*, p. 366.
- 5) C. Mango, "Byzantinism and the Romantic Hellenism", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 28(1965), pp. 29-43; P. Magdalino, "Hellenism and Nationalism in Byzantium", in: idem, *Tradition and Transformation in Medieval Byzantium*, Aldershot, Variorum Reprints, 1991, article XIV, pp. 1-29; R. Beaton, "Koraes, Toynbee and the Modern Greek heritage", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 15(1991), pp. 1-18. ちなみにマンゴーとビートンの論文は、コライス講座教授就任講義をもとにしたもの。イギリスにおけるビザンツ・近代ギリシア研究の展開については、A. A. M. Bryer, "Byzantine and Modern Greek studies: A partial view", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 12(1988), pp. 1-26が参考になる。
- 6) R. Clogg, *Politics and the Academy: Arnold Toynbee and the Koraes Chair*, London, 1986.
- 7) フィルヘレニズムはこれまで主にギリシア独立戦争の背景にあるヨーロッパの文化・政治的な思潮として研究されてきたが、近年、ギリシア独立というコンテキストを越え、近現代ヨーロッパの政治・文化問題として扱った研究が現れつつある。西洋に発する古代ギリシア文化の研究・教育活動、およびそれに付随した政治問題を18世紀から現代まで通覧した藤

謙三「近代におけるギリシア文化の復興」、同編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993年は必読の邦語論文。イギリスのフィルヘレニズムの歴史・文化的性格については、D. Roessel, *In Byron's Shadow: Modern Greece in the English and American Imagination*, Oxford, 2002 が示唆に富む好著。

- 8) R. Clogg, "The 'ingenious enthusiasm' of Dr. Burrows and the 'unsatiated hatred' of Professor Toynbee", *The Modern Greek Studies Yearbook*, 11(1993), pp. 75-98 (reprinted in: idem, *Anglo-Greek Attitudes: Studies in History*, London, 2000, pp. 36-59). 本稿で参照したのは2000年の再録版。
- 9) D. Roessel, *op.cit.*, pp. 13-41; T. Spencer, *Fair Greece Sad Relic: Literary Philhellenism from Shakespear to Byron*, London, 1954.
- 10) W. Churchill, *The World Crisis: The Aftermath*, London, 1929, p. 391. ロイド・ジョージのこの発言に対するチャーチルの返答は以下のとおりである。「もしそうであるなら、あなたはそれについて何をなさるつもりですか。あなたには派遣可能な軍隊はありません。あなたは使用可能な金がないと常々おっしゃっているではありませんか。あなたには支援してくれるような世論もないのです。保守党は伝統的にトルコの友人です。あなたの民衆、内閣、将官たちの偏見はみな親トルコです。私たちは世界で最も強力なマホメット国なのです。長引く反トルコ・親ギリシア政策に対しては、必ず、非常に強い反対が生じるでしょう。その上、トルコ人は獐猛で手に負えず、非常に危険です。もしギリシア人がトルコを征服しようとするなら彼らは叩きのめされるでしょうし、コンスタンディノスが(ギリシア国王に)復帰した今、あなたが彼らを効果的に支援することは決して適わないでしょう。」*Ibid.*, p. 391.
- 11) D. Roessel, *op.cit.*, pp. 187-209; E. Goldstein, "Great Britain and Greater Greece, 1917-20", *Historical Journal*, 32(1989), pp. 339-56; idem, "Holy Wisdom and British foreign policy, 1918-1922: the St. Sophia redemption agitation", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 15(1991), pp. 36-64. ロイド・ジョージ時代のイギリス社会については、ロイド・ジョージ自身の回顧録、D. Lloyd George, *War Memoirs of David Lloyd George*, 6 vols., London, 1933 (内山賢次ほか訳『世界大戦回顧録』平凡社、1945年) および水谷三公『王室・貴族・大衆、ロイド・ジョージとハイ・ポリティクス』中央公論社、1991年も参照されたい。
- 12) R. Clogg, *A Concise History of Greece*, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge, 2002, pp. 46-97. 高久暁訳『ギリシア近現代史』新評論、1998年は初版の邦訳。
- 13) ギリシア・トルコ戦争については、M. Llewellyn Smith, *Ionian Vision: Greece in Asia Minor, 1919-1922*, rev. ed., London, 1998 が詳しい。同時



- 期イギリスの中東外交を包括的に検討した E. Kedourie, *England and the Middle East: The Destruction of the Ottoman Empire*, London, 1956 も参考になる。
- 14) R. Clogg, *A Concise History*, p. 94; M. Llewellyn Smith, *op.cit.*, pp. 284-311. 「スミルナの惨事」は政治・外交的な大事件であっただけでなく、ギリシアのナショナリズムと西洋世界のフィルヘレニズムに多大な衝撃を与え、軌道修正を余儀なくさせたという点で、文化的な大事件でもあった。D. Roessel, *op.cit.*, pp. 210-230; T. Doulis, *Disaster and Fiction: Modern Greek Fiction and the Impact of the Asia Minor Disaster of 1922*, Berkeley, 1977; R. Beaton, *An Introduction to Modern Greek Literature*, rev. ed., Oxford, 1999, pp. 66-127.
- 15) 注 10 のチャーチルの返答を参照。
- 16) D. Roessel, *op.cit.*, pp. 190-191.
- 17) R. Clogg, *Politics and the Academy*, p. 1; R. Clogg, “Burrows and Toynbee”, pp. 41-42.
- 18) G・マリー（1866-1957年）は、古典学界においてはギリシア悲喜劇の研究・翻訳活動で知られているが、娘婿のトインビーと同様、時事・国際問題にも大きな関心を寄せ、1923年から38年まで国際連盟の議長を務め、1945年から47年にかけて国際連合総会の初代議長を務めている。国際問題に関する彼の著作では、次のようなものがある。G. Murray, *The Foreign Policy of Sir Edward Grey, 1906-1915*, Oxford, 1915; idem, *Faith, War and Policy: Lectures and Essays*, Boston, 1918; idem, *Liberality and Civilization*, London, 1938; idem, *From the League to U.N.*, London, 1948. マリーの生涯およびトインビーとの関係については、W.H. McNeill, *op.cit.*および G. Murray, *Gilbert Murray: An Unfinished Autobiography*, ed. by J. Smith and A. Toynbee, London, 1960、F. West, *Gilbert Murray, A Life*, London, 1984などを参照されたい。
- 19) R. Clogg, *Politics and the Academy*, p. 1. バローズには評伝 G. Glasgow, *Ronald Burrows: A Memoir*, London, 1924がある。ヴェニゼロスはこの評伝に一文を寄せ、その中でバローズが死の直前に彼に宛てた手紙を紹介している。 *Ibid.*, pp. xii-xiii.
- 20) ニュージーランド出身の学者ペンバー・リーヴズ（1857-1932年）は、バローズと同様、熱烈なフィルヘレンとして知られていた。K. Sinclair, *William Pember Reeves: New Zealand Fabian*, Oxford, 1965を参照。彼とギリシア人の関係については同書 319-334頁に詳しい。
- 21) イギリス・ギリシア同盟（The Anglo-Hellenic League）は、ペンバー・リーヴズを議長、バローズを副議長、カサヴェッティを秘書とし、会合と出版を通じて親ギリシアの主張を宣伝した。組織の政治色が最も強かった

- 1910年代後半においては、チャーチルもその活動に深く関わっていた。組織は現在も活動を続けている。R. Clogg, *Politics and the Academy*, pp. 2-3.
- 22) *Ibid.*, pp. 3-19.
- 23) *Ibid.*, pp. 3-5.
- 24) *Ibid.*, pp. 8-9.
- 25) パローズはミタランガに対して、「それは感情の問題でも、学問的な流行でもありません。それは、ギリシア王国の政治・ビジネス上の利益とギリシア民族すべてを左右する重大で現実的な問題なのです。」と述べて、講座創設の意義を強調している。 *Ibid.*, pp. 10-11.
- 26) *Ibid.*, p. 17.
- 27) D.M. Nicol, *Joannes Gennadios, the Man: A Biographical Sketch*, Athens, 1990, p. 14.
- 28) 顧問委員会は、ロンドン大学総長と副総長、キングズカレッジ学長、キングズカレッジ教授3名(R・W・シートン・ワトソンを含む)の大学関係者と、3名の学外者から構成されることになった。クログによれば、ゲンナディオスの顧問委員会入りにはパローズの強力な後押しがあったという。R. Clogg, *Politics and the Academy*, p. 17.
- 29) D.M. Nicol, *op.cit.*, p. 30.
- 30) 近代ギリシアにおけるビザンツ再評価の流れを決定づけたのは、ギリシア民族主義史学の祖コンスタンディノス・パパリゴプロスとその名著『ギリシア民族史』(K. Paparrigopoulos, *Istoria tou Ellinikou Ethnous*, 5 vols, Athens, 1860-1874)とされている。P.A. Kitromilides, "On the intellectual content of Greek nationalism: Paparrigopoulos, Byzantium and the Great Idea", in: D. Ricks and P. Magdalino eds., *Byzantium and the Modern Greek Identity*, Aldershot, 1998, pp. 25-33; R.D. Argyropoulos, "La réhabilitation de Byzance par les intellectuels Grec (1860-1912)", in: *Byzantium: Identity, Image, Influence, Major Papers, XIX International Congress of Byzantine Studies, University of Copenhagen, 18-24 August, 1996*, Copenhagen, 1996, pp. 336-351; idem, *Les intellectuels Grec à la recherche de Byzance, 1860-1912*, Athens, 2001.
- 31) ミラー(1864-1945年)の代表的な著作には、以下のものがある。W. Miller, *The Latins in the Levant: A History of Frankish Greece*, London, 1908; idem, *Essays on the Latin Orient*, Cambridge, 1921; idem, *Trebizond: The Last Greek Empire*, London, 1926.
- 32) R. Clogg, *Politics and the Academy*, pp. 3-4, pp. 22-23. シートン・ワトソン(1879-1951年)は当時、キングズカレッジ・スラヴ語研究所(現、

- スラヴ語・東欧研究所)のスタッフの一員。シートン・ワトソンの研究・政治活動については H. and C. Seton-Watson, *The Making of a New Europe: R.W. Seton-Watson and the Last Years of Austria-Hungary*, London, 1981 を参照。
- 33) R. Clogg, *Politics and the Academy*, pp. 23-38.
- 34) 1910 年代のトインビーの主な著作 (パンフレットを含む) は以下のとおり。A.J. Toynbee, *Greek Policy Since 1882*, London, 1914; idem, *Armenian Atrocities: The Murder of a Nation*, London, 1915; idem, *Nationality and the War*, London, 1915; idem, *The Treatment of Armenians in the Ottoman Empire*, London, 1916; idem, *The Murderous Tyranny of the Turks*, London, 1917.
- 35) A.J. Toynbee, *The Place of Mediaeval and Modern Greece in History*, London, 1919.
- 36) *Ibid.*, p. 3.
- 37) *Ibid.*, pp. 3-4.
- 38) *Ibid.*, p. 4.
- 39) ビザンツ学界では周知の事実であるが、19 世紀においてビザンツ研究が盛んであったのは、ルネサンス以来の人文主義の伝統を誇るフランスとドイツである。イギリスでビザンツ研究が本格化するのには 20 世紀に入ってからである。J・B・ビュアリ (1861-1927 年) はその発展を用意した著名な末期ローマ史家。主要著作は、J.B. Bury, *A History of the Later Roman Empire, From Arcadius to Irene (395 A.D. to 800 A.D.)*, London, 1889; idem, *A History of the Eastern Roman Empire from the Fall of Irene to the Accession of Basil I (A.D. 802-867)*, London, 1912 など。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の編者としても知られる。欧米におけるビザンツ史学史については、G・オストロゴルスキー著、和田廣訳『ビザンツ帝国史』恒文社、2001 年の序説が参考になる。イギリスについては、A・ブライアーの前掲論文、R. Cormack and E. Jeffreys eds., *Through the Looking Glass Byzantium through British Eyes*, Aldershot, 2000、とりわけ同書所収の Averil Cameron, “Bury, Baynes and Toynbee”, pp. 163-176 を参照されたい。
- 40) ギュスタヴ・シュランベルジェ (1844-1929 年) は、シャルル・ディール (1859-1944 年) とともに 19 世紀から 20 世紀にかけて活躍したフランス・ビザンツ学界の重鎮。ここでゲンナディオスによって示唆されているのは、G. Schlumberger, *Un empereur byzantin au dixième siècle, Nicéphore Phocas*, Paris, 1890 と idem, *L'épopée byzantine à la fin du dixième siècle*, Paris, 1896 であろうと思われる。
- 41) A.J. Toynbee, *The Place of Greece*, pp. 5-6.

- 42) *Ibid.*, pp. 7-10.
- 43) *Ibid.*, pp. 10-26.
- 44) *Ibid.*, p. 26.
- 45) *Ibid.*, pp. 26-27.
- 46) ビザンツに対するトインビーのネガティブな見方は、啓蒙期ヨーロッパの歴史観に由来するものであり、例外的なものではない。拙稿「啓蒙主義的ビザンツ観の行方 近代ビザンツ研究の歩みについてのメモワール」『人文知の新たな総合に向けて：21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第一回報告書』2003年、144-171頁は、20世紀西欧のビザンツ研究においても、18世紀以来の啓蒙主義的で合理主義的なビザンツ観が大きな影響力を有していたことを論じている。井上浩一「ビザンツと「ヨーロッパ」」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年も同様のテーマを面白く論じているが、20世紀ビザンツ研究のイデオロギー性および近代ギリシアのナショナリズムの問題は触れられていない。西欧の研究蓄積に多くを負うわが国のビザンツ研究ではこれまで問題とされてこなかったが、ビザンツ研究の歴史を見る場合、西欧系の研究者とギリシア系の研究者の間にあるイデオロギー・ギャップに十分留意する必要がある。わが国におけるビザンツ研究の歴史については、拙稿“Byzantine studies in Japan: A historical review”, *Bulletin of British Byzantine Studies*, 29(2003), pp.89-105を参照されたい。
- 47) 第一次大戦勃発後、身体的理由により兵役を免除された彼は、オスマン領におけるアルメニア人虐殺の調査に携わり、その詳細な報告はブライス卿の序文を付したブルーブック（イギリスの政府刊行物）として出版された。A.J. Toynbee, *The Treatment of Armenians in the Ottoman Empire*, London, 1916.
- 48) A.J. Toynbee, *The Western Question*, pp. xi-xii.
- 49) イコノモスはコライス講座教授には採用されなかったが、キングズカレッジで雇用され、近代ギリシア語講師を務めていた。イコノモスの報告書のフルタイトルは以下のとおり。L. Oeconomus, *The Martyrdom of Smyrna and Eastern Christendom: A File of Overwhelming Evidence, Denouncing the Misdeeds of the Turks in Asia Minor and Showing their Responsibility for the Horrors of Smyrna*, London, 1922. イコノモスはトインビーおよびその『西方問題』に言及しなかったが、国王コンスタンディノスの秘書を務めたギリシア人G・M・メラスはトインビーと『西方問題』を直接非難する小著を出版している。G.M. Melas, *The Turk As He is, Answer to a Libel: Sidelights on Kemalism, Bolshevism and Pan-Germanism*, London, 1922.

- 50) トインビーはギリシア人からは反ギリシア主義者とみなされたが、トルコ人からは好意的に見られていた。論争の末期、トインビーはトルコ共和国イギリス公使からイスタンブール大学での研究ポストを紹介されている。トインビーはこの誘いを断り、1925年からロンドンの王立国際問題研究所の所長に就任したが、クログによると、トルコ公使宛で受諾を示唆する内容の彼の未投函の書簡が存在するという。R. Clogg, *Politics and the Academy*, p. 102.
- 51) 1924年にトインビーはギリシア史について2冊の史料紹介的な書物を著しているが、いずれも古代に焦点を当てたものである。A.J. Toynbee, *Greek Civilisation and Character: The Self-revelation of Ancient Greek Society*, London, 1924; idem with G. Murray, *Greek Historical Thought From Homer to the Age of Heraclius*, London, 1924. 興味深いことにトインビーは晩年になって、古代だけでなく中世と近代を含めたギリシア史研究に回帰し、以下の2冊の書物を著している。A.J. Toynbee, *Constantine Porphyrogenitus and His World*, London, 1973; idem, *The Greeks and Their Heritages*, Oxford, 1981. 前者は中期ビザンツの文人皇帝コンスタンティノス・ポルフュロゲニトスを扱った浩瀚なモノグラフで、遺著となった後者はギリシアの歴史と文化を古代から現代まで通覧したもの。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）